薪火を見つめ直す

ー薪火を伝えるために必要な要素とはー

森と木のクリエーター科　森林環境教育専攻　福田　一葉

１．背景

私の実家には薪ストーブがあり、庭で焚き火をして育った。小学生の頃は子ども対象のキャンプへ定期的に参加し薪火で調理したりお風呂を炊いたりするなど、薪火が身近にある生活を送ってきた。「薪火」とは、「薪を燃やした火」のことである。

私にとって薪火の魅力は、喋らなくても気にならないところ、ぼーっとできるところ、薪火で調理するとご飯が美味しく感じるところである。

大学時代は子どもキャンプのスタッフとして、森や川で子どもたちとたくさん遊んできた。その中でも、着火のレクチャーや調理、キャンプファイヤーなど薪火に関することも子どもたちと一緒にやってきたが、とあるキャンプでの薪火調理中、「火を初めて見た」という子どもに出会い衝撃を受けた。話を聞くと、家はオール電化で火を見たことが無かったようだ。「火を初めてみた」という参加者は他にもいた。

現代においては、利便性・安全性を求めるあまり、薪火が暮らしから遠ざかっている。その結果、自然との繋がり・ゆっくり流れる時間・危険性を感じる機会・災害時などに対応する力・対話する場などが減少している。もう一度「薪火」という選択肢を持つことでこれらの社会課題解決への一助となるかもしれない。

２．目的

そこで、薪火の役割を明らかにし、薪火の良さを伝えていく為に必要な要素を探ることを本研究の目的とする。

３．研究の流れ

人と薪火についての基礎を知る、体験とヒアリングから探る、実践から探る、薪火を伝えていく上で必要な要素の洗い出し、まとめの順で行う。

４．人と薪火についての基礎を知る

人と薪火の歴史については諸説あるが、約 180～80 万年前には人が火を利用するようになった。約 16,000 年前には囲炉裏が生まれ、約 1,700 年前にはかまど、約 1,200 年前には火鉢、約 120 年前には電気やガスが普及し始めた。それと同時に森林の循環が途絶え始めた。現代ではオール電化が進み、前述のように暮らしから火が消えていった。

実際に象印マホービン株式会社が小学生の子どもを持つ親に行った調査によると、「マッチで火をつけられるか」という問いに対し、1995 年には「できる」と回答したのが 58.9%だったのに対し、2015 年には 18.1%と大幅に減少している。

薪火を使う人が減少した理由として、火傷や火災の危険性や、手入れ･管理などが面倒なこと、使える場所が少ないことなどから、より安心安全な電気やガスが普及したと考えられる。

薪火を使わなくなったことで、自然と共生する実感が薄れる、火のある暮らしから生まれた文化や言葉も実感を伴わなくなるなどといったことが起きてくるのではないだろうか。

５．体験とヒアリングから探る

表１　薪火に関する体験・ヒアリング一覧

R5/5/20-21	清里オーガニックキャンプ2023
R5/6/6	焚き火×メタバース
R5/9/9-10	有限会社きたもっく　TAKIVIVA
R5/11/3-5	第１８回森のようちえんフォーラム 分科会「いざという時に役立つブッシュクラフト講座」
R5/11/23	ｍｏｒｉｎｏｓ 「摩擦発火と焚き火マンダラ講座 ～素材選択から気候変動まで～」
R5/11/28	般社団法人いいなみ自然学校 代表 北澤さん
R6/1/9	みんなのアウトドア 代表 原田さん

右表の場所で薪火に関する体験やヒアリングを行った。

メタバースというインターネット上の仮想空間での焚き火場を試行する手塚氏によれば、利用者からは、喋らなくても違和感ない、初対面でも普通に会話しているという声をもらうようだ。実際に体験してみると、暖かさや煙、匂いがなかったからか、私は物足りなさを感じたが、実際の焚き火と同じように不規則に揺らぐ火を見ていられるので直接相手の顔を見る必要がなく、自分と相手の存在感を薄くしか感じないので安心してその時間を過ごすことができた。

有限会社きたもっくが運営する TAKIVIVA は、「未来発火点」をキーワードに、焚き火に集う宿泊型ミーティング施設だ。焚き火が持つ社会的な効果や可能性を活用して企業のミーティングや研修の場となっている。スタッフの方に話を伺うと、「場の準備だけして火が着いたらその場から離れる。火が仕事をしてくれるから、場を信じて任せる。」と仰っていた。

６．実践から探る

表２の場で実践を行った。明宝小学校では、森

の恵みがエネルギーになることに気づいてもらうことをねらいとして、５年生９名と担任の先生に火起こし体験をした。「枝集めが楽しかった」「火を大きくすることが怖かったけど火がついた時嬉しかった」などの声をもらった。先生からは「教わるより自分でやってみて学習する方が楽しいと感じ、授業作りでも活かしたい」という声があった。参加者が円に集まることでお互いを確認でき、協力したり教え合ったりと対話の多い時間となった。また、教えすぎないことで、教員も含めた参加者の主体的な学び合いの場となった。

表２　薪火に関する実践一覧

R 5/7/1.8	豊田市 「家族で楽しむキャンプのススメ」
R 5/8/24	IP実習　「雨でも焚き火だ！」
R5/10/11	明宝小学校 「森の恵みを生かす～火をたく～」
R5/10/21	セラミックパークMINO 「『やってみよう！セラパの山で野焼き』器づくりと薪集めの日」
R5/10/27, 28,29	ミノマチヤマーケット 「火鉢を囲んで休憩しませんか？」
R5/11/11, 12	セラミックパークMINO 「自然にあるもので火をつけよう！」
R5/11/25	翔楓祭 「火起こし体験」
R5/12/9-11,15-17	冬のもりもりキャンプ

セラミックパーク MINO では、火の三角形を体感することをねらいとした。火の三角形とは、燃焼に必要な「燃えるもの。酸素・熱」の 3 要素である。マッチを 1 人で使えることを条件とし、３～７歳の７名が参加した。火の三角形を子ども自身に体感してもらう為、保護者には、「お子さま自身で試行錯誤する時間を取りたいので、今日は見守りでお願いします」と最初に伝えた。参加者からは、「枝や葉を探すのが楽しかった」「怖かったけど楽しかった」などの声をもらった。保護者からは、「子どもの力を信じるって大事」「いつもすぐに口出ししてしまっていた」「普段はすぐにできないと諦めるが、自分なりに考えていた」などの声があった。参加者のチャレンジや試行錯誤を私自身も、保護者も見守ることができた。そばに保護者がいると子どもが保護者を頼ってしまう様子が何度か見られた為、参加者と見守る人の距離を考え直してみようと思う。

図１　火の三角形

ミノマチヤマーケットでは、火鉢を設置し、自ずと人が集まり、来訪者同士での会話を生み出せるか実証した。これは前述の TAKIVIVA に倣い、火がする仕事に任せる実験である。３日間で計５０名程度が利用した。火鉢の周りでは、休憩場所として利用したり、子どもだけで場が成立していた。利用者からは、「火があることで話しやすかった」「おばあちゃん家にいるみたい」「ここに根が生えそう」などの声をもらい、特に「落ち着く」「懐かしい」という声が多かった。炎がなくても、暖かさとお湯を沸かせ、おもちが焼けることで自ずと人が集まり、初対面同士でも会話が生まれていた。また、「こんなところで餅焼けないでしょ」と言っていた小学生は餅が焼けることに気づき、周りにいた家族や友達に嬉しそうに伝えていた。

最後に、昨年 12 月に行われたもりもりキャンプというフリーキャンプで火の周りで何が起こるのか観察した。観察の中で火から多くの役割や遊びが自然と生まれていたことに気が付いた。役割も単なる役割だけに留まらず、全てが遊びに繋がっていて、そこから更に新しい遊びやチャレンジが生まれていた。

７．まとめ

以上から、薪火の役割を抽出・分類した。

図２　薪火の直接的役割

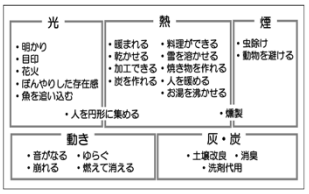

図３　薪火の心理的役割

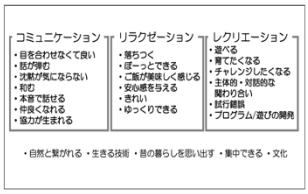

図２は薪火そのものから出てきている直接的役割で、光・熱・煙・動き・灰/炭に分類できた。図３は図２の直接的役割同士が作用しあって生まれる役割でコミュニケーション、リラクゼーション、レクレーションなどに分類できた。これに関しては薪火が「なんとなくいいよね」と言われる心理的役割である。他に、様々な役割が複雑に混ざり合っており分類できなかった役割もあった。

次に、表３は薪火を伝えていく上で必要な要素をまとめたものである。

表３　薪火を伝えていく為に必要な要素

	日常的な薪火利用者	薪火体験プログラムの伴走者	焚火を通じた心理的に安全な場づくり
知識	・火の３原則を理解している ・火の基本的な活用方法を理解している。 ・火の危険性を理解している ・たき火が安全にできる環境条件の理解 ・たき火に必要な素材や道具を理解している	・火と人の歴史・文化への理解 ・火の魅力への深い理解 ・火の役割への深い理解 ・火に関する法令への理解 ・インタープリター・ファシリテーターへの理解	・焚火がもつ心理的（機能）を体系的に理解している ・より良い学び合いの場に必要な原則を理解している。
技能	・安全に火付け・維持管理・始末ができる。 ・火の熱や明るさなどを様々に活用できる。（照明・防寒・調理・加工・遊び・目印など） ・小火・火傷にたいして適切な処置ができ、被害を最小限にとどめられる。	・様々な火のおこし方ができる。 ・目的に合った火起こし方法や道具を選べる ・体験者の成長プロセスに感じることができる ・関係者や関係機関に火の扱いの調整ができる	・焚火が始める前にその場の目的に適した場の設営ができる。 参加者同士の関係性を醸成させる力・タイミングを作ることができる。 ・プログラム・遊びを開発できる。
あり方姿勢	・火・人・社会が好き ・責任をもって火の管理する姿勢がある	・体験者の自発的な成長を信じ、体験者のチャレンジや試行錯誤を見守れる。 ・体験者同士の学び合いの場を信じている。 ・場の力を信じて体験者に本当に必要な時にだけ最小限で適切な関わり方ができる。	・主体的・対話的な深い学びの重要性を信じている。 ・対話の場の心理的安全性の重要性を信じている。 ・未知の分野にチャレンジする姿勢がある。
	・チーム／組織／社会の中での自分の役割を見つけることができる。 ・フィードバックを歓迎できる（成長しようとする意欲がある） ・薪火の力で地域や社会をよくできると考えている。 ・自分のバイアスに気づき、克服しようという意思がある ・薪火の力を信じている		

この中でも①体験者の自発的な成長を信じ、体験者のチャレンジや試行錯誤を見守れる。②場の力を信じて体験者に本当に必要な時にだけ最小限で適切な関わり方ができる、以上２つを特に大切にしていきたい。

８．今後の展望

私は卒業後、薪ストーブなどを輸入販売する会社で販売やワークショップの企画や運営を行っていく。本研究でまとめたものを武器として、ただ薪火の魅力を伝えるだけでなく、人と人、人と自然を繋げる入口になるようなワークショップを展開していきたい。